

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320047

研究課題名（和文）現代アイルランド演劇の総合的研究と国際的研究拠点の確立

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Contemporary Irish Theatre and Establishment of International Research Centre

研究代表者

岡室 美奈子（OKAMURO MINAKO）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：10221847

研究成果の概要（和文）：本研究では、サミュエル・ベケットとフランク・マクギネスの作品を中心に現代アイルランド演劇を、サウンドスケープ、モダニズム、オカルティズム、視聴覚テクノロジー、アイルランド史など多角的な視点から研究し、その成果の幾つかは国際的な学術誌や論集に掲載された。また、国内の研究者を組織してアイルランド演劇研究会とベケット・ゼミを運営し、成果を海外に発信するとともに海外の研究者との知的交流を推進し、国際的研究拠点の確立を図った。

研究成果の概要（英文）：Our project encompassed research in, as well as the promotion of, scholarship on contemporary Irish theatre. Our research investigated the plays of Samuel Beckett, Frank McGuinness, and others from the viewpoints of soundscape, modernism, occultism, audio-visual technology, and Irish history, yielding studies included in varied international publications. We furthermore established, as activities of the International Research Centre on Irish Theatre, the Research Circle of Irish Theatre and the Beckett Seminar, which facilitate Irish theatre scholarship in Japan and promote academic exchange through journals and international conferences between Japanese scholars and their counterparts abroad.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
年度			
総計	11,500,000	3,450,000	14,950,000

研究分野：アイルランド演劇・文学、現代演劇、テレビ論

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド演劇、ベケット、マクギネス、トム・マーフィー、北アイルランド、モダニズム、オカルティズム、声

1. 研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費補助金基盤研究B(15320040)「アイルランド演劇の総合的研究とアイルランド演劇アーカイブズの構築」(平成15年度～17年度)、および科学研究費補助金基盤研究B(18320052)「現代アイルランド演劇の総合的研究と研究拠点の形成」(平成18年度～19年度)を発展的に継承するものである。本研究課題の申請者である岡室美奈子(研究代表者)、三神弘子(研究分担者)、八木斉子(研究分担者)は、平成14年度に21世紀COE研究拠点に採択された早稲田大学演劇博物館を中心とする研究プログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」および平成19年度にグローバルCOE研究拠点として採択された同演劇博物館を中心とする研究プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」の事業推進担当者として演劇理論研究を推進してきたが、基盤研究B(15320040)および(18320052)では、COE研究拠点としての演劇博物館の研究資源を最大限に有効活用しつつも、COEの巨視的研究とは一線を画してアイルランド演劇に特化することにより、日本におけるアイルランド演劇の拠点確立のための基盤形成を行ってきた。

具体的な成果としては、まず第一に、アイルランド国立ダブリン大学(UCD)のデクラン・カイバード教授、クリストファー・マレイ教授、アンソニー・ロウチ博士というアイルランド演劇研究の第一人者たちや日本の若手研究者と共同研究を推進し、さらに、同大学の演劇専攻に所属するジョー・ロング教授、キャシー・リーニー博士らを加えてセミナーを催し、アイルランド演劇論文集という形で、アイルランドでの出版を実現させたことである(Hirko Mikami, Minako Okamuro, Naoko Yagi, eds., *Ireland on Stage: Beckett and After*,

Dublin: Carysfort Press, 2007)。この論文集 *Ireland on Stage: Beckett and After*では、サミュエル・ベケットをはじめとして、フランク・マクギネス、トム・マーフィー、ブライアン・フリール、コナー・マクファーソン、セバスチャン・バリーなどの現代作家はもとよりオスカー・ワイルドやW・B・イェイツといった、既にアイルランドの〈古典〉とも言える作家たちをも含めた広範な劇作家およびデスペレート・オブティミスツ等の新しい演劇集団を広範に取り上げ、まさに「アイルランド演劇の総合的研究」の成果として、アイルランド演劇の現在を的確に浮かび上がらせることができたと言えよう。また、University of Reading内に本拠を置くBeckett International Foundationが運営するベケット・アーカイブズに収蔵された上演資料のデジタル化と購入、および現代アイルランド演劇の代表的劇作家の一人フランク・マクギネスの資料集成であるティリング・アーカイブの複製の購入を実現し、早稲田大学演劇博物館内での一般公開を既に一部開始したことも大きな成果と言える。どちらもアジアでは唯一の貴重な資料であり、アジアにおけるアイルランド演劇研究の発展に貢献するものである。

本研究は、こうした基盤研究B(15320040)および基盤研究B(18320052)の具体的な成果を継承しつつ、より世界に目を向けることにより、アイルランド演劇研究の国際的拠点を確立すべく計画された。本研究では、これまでに築いてきたアイルランド演劇の代表的な研究者たちとの太いパイプを維持しつつも、海外の新進気鋭の若手研究者たちとも積極的に交流を行い、若手研究者セミナーを開催するなど、彼らと日本の若手研究者が交流し切磋琢磨しあえるような環境整備にも寄与することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 現在世界的に注目されているアイルランド演劇（特に現代アイルランド演劇）の総合的研究を推進し、また、(2) アイルランド演劇研究関連資料を充実させることにより、国際的な研究拠点を形成・確立し、アイルランド演劇研究の発展に寄与することにあつた。以下、それぞれの詳細を述べる。

(1) アイルランド演劇の総合的研究

本研究課題の主たる目的は現代アイルランド演劇研究の国際的な拠点確立にあるが、それを支えるのは劇作家や作品等の個別研究である。その中心となるのは、サミュエル・ベケットと、現在、代表的な劇作家と目されるフランク・マクギネスである。岡室は、主としてベケットの演劇をアイルランドの文化的伝統とヨーロッパのモダニズム／ポスト・モダニズムの両方に布置した上でテクノロジーや神秘思想との関連をメディア論的視点から解明することを目指した。三神は、マクギネスと、やはり現代アイルランド演劇の中心的な劇作家の一人トム・マーフィーの作品と歴史との関わりを研究することを目指した。八木はマクギネスの作品分析、特に、設定された舞台空間における声と音響について考察することを目指した。

言うまでもなく、本研究はベケットとマクギネスの研究に限定されるわけではないが、この二者の研究に関しては、申請者たちは申請時において既に国際的な水準にあつた。岡室は、2006年度にベケット生誕100年記念国際シンポジウムをオーガナイズし、世界各国から研究発表を公募する東アジア初の本格的なベケットの国際学会として注目された。その成果は、国際的学術叢書 *Samuel Beckett Today/Aujourd'hui* 19: *Borderless Beckett: Beckett sans frontières*,

Amsterdam: Rodopi, 2008 として、岡室を編集長として刊行された。そのほかにも、論文が2008年1月にOxford University Pressから刊行された Linda Ben-Zvi and Angela Moorjani eds., *Beckett at 100: Revolving It All* に収録されるほか国際的な学術誌に数本の論文が掲載されている。三神はマクギネスの研究書 *Frank McGuinness and His Theatre of Paradox*, Colin Smythe, 2002 (平成13年度科学研究費補助金研究成果公開促進費) を出版している。また、岡室、三神、八木はいずれも国際学会で発表を行なっている。こうした経験を活かし、ベケットとマクギネスの研究を核としつつ、国内外の研究者たちと連携して広範な劇作家や作品にも目を向け、現代アイルランド演劇研究の拠点の確立と発展を目指した。

(2) アイルランド演劇の国際的研究拠点の確立

基盤研究 B (15320040) および基盤研究 B (18320052) では、前述のように、ベケットの上演資料とマクギネスのティリング・アーカイヴの構築と整備を行い、アイルランド演劇の研究拠点形成の基盤作りを図った。本研究では、こうした資料のさらなる整備に加え、既に購入した資料の電子化や新資料の収集等によるアーカイヴの一層の充実化を図り、また、日本の研究文献書誌の作成にも着手することを目指した。

さらに、アイルランド演劇研究会とベケット・ゼミを運営し、日本における研究者の組織化と交流をとおして、研究の発展に寄与することを目指した。また、海外の研究者たちとの知的交流を積極的に行い、日本のアイルランド演劇研究者たちの国際的な活躍を推進する開かれた研究拠点を確立・発展させることを目指した。

3. 研究の方法

上記研究目的を達成するため、主として以下の三つの方法をとった。

(1) テキスト研究

①岡室：主としてベケットの演劇をアイルランドの先輩作家であるウィリアム・バトラー・イェイツやジェイムズ・ジョイスとの関連で論じると同時に、ヨーロッパのモダニズム／ポスト・モダニズムの文脈の中に布置し、テクノロジーや神秘思想との関連をメディア論的視点から解明する。三者ともヨーロッパのモダニズムへの志向性を持っていた作家であり、オカルティズムへの関心も、モダニズムにおけるオカルト・リヴァイヴァルの隆盛と切り離すことはできない。しかし同時に、オカルティズムをとおして、むしろドルイド信仰などアイルランドの文化的伝統に回帰したという点でも共通している。ベケットの演劇・テレビ作品の視聴覚的特質に着目し、そこにあらわれた錬金術、降霊術的要素を抽出し、イェイツやジョイスからの影響を具体的に明らかにしていくとともに、ヨーロッパのオカルト芸術（デュシャンらの作品、シュルレアリストの自動記述の試みなど）からの影響と光学・音響テクノロジーとの関連についても考察する。

②三神：フランク・マクギネスの作品を中心に据えながら、アイルランド史が現代アイルランド演劇にどのように反映され、劇化されているか、さらにアイルランドという比較的小さなコミュニティにおいて、演劇というジャンルが逆に社会にどのような形でフィードバックされ、アイルランド人の史観の形成、アイデンティティ形成に影響を与えているかを中心に研究を進める。

③八木：フランク・マクギネスによる作品が各々設定する舞台空間における声と音響の可能性を探る第1段階として、以下の2点

を中心に研究を進める。1) 一般に、舞台とそれ以外のメディア（映画、テレビ、ラジオ、仮想3次元等）は声と音響をどのように解釈し、分析し、その可能性を示唆しているのか、メディアの違いが生み出す特徴を浮かび上がらせるべく、文献および映像資料を当たりながら考察する。2) マクギネスの作品から数点を選び、1) を視野に入れながら詳細なテキスト分析を試みる。1) と2) を有機的に結び付ける。

(2) 資料調査と海外の研究者との交流

個々の研究と上記研究目的(2)の推進のため、University College Dublinを中心とする海外の研究機関や図書館、アーカイブで資料の調査・研究・収集を行ない、併せて海外の研究者たちと活発な意見交換を行なうため、春期・夏期休暇を利用して出張を行なう。

(3) 研究会やゼミの開催

三神は八木とともにアイルランド演劇研究会を組織して拠点形成を図り、岡室はベケット・ゼミを組織して若手研究者の育成を図る。

(4) 海外における資料の調査・研究・収集

岡室、三神、八木は、国内での研究活動に加えて、University College Dublin, Trinity College Dublin, University of Ulster, アイルランド国立図書館、大英図書館、The University of Western Sydney, The University of Texas 等に出張し、図書館およびアーカイブにおいて資料の調査・研究・収集を行ない、Declan Kiberd, Anthony Uhlmannらアイルランド演劇研究やベケット研究の第一線で活躍している海外の研究者との知的交流を推進する。また、岡室はベケットの第二次大戦中・戦後の足跡を追うため、南仏にも出張する。

以上4点の研究方法を有機的に組み合わせ研究を推進し、研究拠点形成をはかった。

4. 研究成果

以下、個別の成果を記す。

(1) 岡室は、主としてダブリンで資料収集を行ない、ベケットの後期演劇やテレビドラマにおける亡霊的なイメージを、W・B・イエイツからの影響を中心に考察した。その結果、日本の能がイエイツを経て「亡霊劇」としてベケットの『…雲のように…』に間接的に影響を与えたことを明らかにし、*Samuel Beckett Today/ Aujourd'hui 21* (2009) に発表した。ベケットと能については、高橋康也らによる優れた先行研究があるが、テレビドラマへの影響を本格的に論じた論考は初めてである。また、同作品における映像が、脳から直接イメージを投射する、所謂「念写」に近いものとして想定されており、モダニズム期におけるオカルティズムから脳科学に至る広範な文化・科学と通底していることを明らかにした。通常の映像として捉えてきた通説を覆すこの成果は『表象・メディア研究』創刊号(2011)に掲載された。2011年3月にはテキサス大学所蔵のベケットの草稿調査により、補強する資料も入手している。

また、ベケット・ゼミを組織し、全国からベケット研究を専門とする大学院生と若手研究者を集めて定期的に研究発表会を行い、若手の育成に力を入れたほか、西シドニー大学のアンソニー・ウルマン教授が編集長を務める *Journal of Beckett Studies* の顧問にも就任し、活発な研究交流を行った。

(2) 三神は、3年間の研究期間において、現代アイルランド劇作家、トム・マーフィーとフランク・マクギネスに焦点をしばり、特に、マーフィーの『飢饉』(1968)、マクギネスの『マグパイのように語る』(2005)を中心に研究を進めた。アイルランドの歴史上の出来事を背景にした「歴史劇」である『飢饉』が、いかに、イエイツ以降のアイルランド演

劇 100年の歴史を意識して書かれているか、構造的に分析した。また、英国で1605年に起こった火薬陰謀事件を題材にした「英国」歴史劇である『マグパイのように語る』を、アイルランドのコンテクストで読み解く可能性について論じた。(それぞれ、国際学会において、英語で発表し、その後、英文、和文による論文を学術誌に掲載した。)

また、平成20年度秋から、本研究の研究分担者八木斉子とともに、アイルランド演劇研究会を組織し、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEとも連動しつつ研究活動を行った。その成果の一環として、平成21年10月に滋賀大学で開催されたIASIL Japanの年次大会でシンポジウムを企画し、八木、三神、研究会メンバー舟橋美香と、ゲストスピーカーのリナ・オドワイヤー氏(National University of Ireland, Galway)とともに「Contemporary Irish Theatre in Context」のテーマで討論した。

(3) 八木は、3年間を通じて「演劇台本上で表現・指示された声と音響を舞台公演がどのように3次元化するか」というテーマをきっかけ、フランク・マクギネスによる演劇作品を理論と実例から検討した。

まず1年目は、声と音響に関する広範な文献を読み込み、理論的な枠組みを固めるための基礎を作った。同時に、マクギネス作品がアイルランド・イギリス演劇界で占める位置を声と音響という観点で捉えなおすために、他の作家達による演劇作品との比較もおこなった。研究成果として、マクギネスの『イノセンス』に登場する人物の声と身体をアントナン・アルトーの演劇論および作品に照らし合わせた論考を『英文学』に発表した。

2年目には、文献講読を継続する一方で、書かれた文字という2次元から舞台という3次元へ焦点を移し、大英図書館が所蔵するマクギネス作品公演の劇場録音資料を聴き、詳

細に記録・分析した。成果として、マクギネスの『シャツ工場の女たち』にみられる声と身体をディケンズ的なレトリックと結び付けた論考を、『教養諸学研究』に発した。

3年目には、1, 2年目の文献講読をもとに理論的な枠組みを決めたうえで、マクギネスによる作品群のなかでも大作であり共通する要素が多くみられる『有為転変の物語』と『マグパイのように語る』の公演について、録音資料の分析結果を言語音、音楽、効果音という3種類の「音」に分類しなおし、論考を加えた。これを3年間の総決算としての論文に仕上げ、『演劇映像学 2010』に発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①岡室美奈子、「ベケットと幽霊テクノロジー——テレビドラマ『…雲のように…』における脳内イメージの投射について——」、『表象・メディア研究』(査読無)、1号、2011、pp.11-41

②Yagi, Naoko, “Speech Sounds, Music, and Sound Effects in Texts/Productions:

McGuinness’s *Mutabilitie* and *Speaking Like Magpies*.” 『演劇映像学 2010』(早稲田大学演劇博物館グローバルCOE紀要)、査読無、第5集、2011、pp.135-158

③Mikami, Hiroko, “Frank McGuinness’s Dark Masque: *Speaking Like Magpies*”, *Irish University Review: Frank McGuinness Special Issue*, (査読有), 40-1, 2010, pp. 114 – 25.

④Yagi, Naoko, “*The Factory Girls*: Reappraising McGuinness’s First Play.”

『教養諸学研究』(早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会)、査読無、128号、2010、pp.91-105

⑤Okamuro, Minako, “Beckett, Yeats and Noh: ...but the clouds... as Theatre of Evocation”, *Samuel Beckett Today/ Aujourd’hui: “Where Never Before: Beckett’s Poetics of Elsewhere: La poétique de l’ailleurs”*, (査読有) 21, Amsterdam: Rodopi, 2009, pp.165-177

⑥三神弘子、「フランク・マクギネスの仄暗い仮面劇:『マグパイのように語る』(2005)」、演劇博物館グローバルCOE紀要『演劇映像学』(査読無)、3号、2009、pp.283-96.

⑦Yagi, Naoko, “A Sound-Vision Dichotomy: McGuinness’s *Innocence*.” 『英文学』(早稲田

大学英文学会)、査読有、95号、2009、pp.146-157

⑧三神弘子、「トム・マーフィーの『飢饉』(1968)とそのコンテクスト」、演劇博物館グローバルCOE紀要『演劇映像学』(査読無)、2号、2008、pp.265-82.

[学会発表] (計5件)

①Mikami, Hiroko, “Frank McGuinness’s *Speaking Like Magpies* in Anglo-Irish Context” (Symposium: Contemporary Irish Theatre in Context chaired by Hiroko Mikami) 国際アイルランド文学会日本支部(IASIL Japan), 2009年10月11日、第26回年次大会、滋賀大学

②Yagi, Naoko, “Frank McGuinness’s *Innocence* (1986) in a Meta-Theatrical Context.” Symposium 1: Contemporary Irish Theatre in Context. 国際アイルランド文学会日本支部(IASIL Japan). 2009年10月10日、滋賀大学

③岡室美奈子、「ベケットによるイエイツ受容——『言葉と音楽』試論」、日本イエイツ協会、2008年9月7日、青山学院大学

④Mikami, Hiroko, “*Famine* (1968) in the Context of Irish (Theatrical) History”, International Association for the Study of Irish Literatures (IASIL), 2008.7.30, Universidade do Porto, Portugal.

⑤Mikami, Hiroko, “Curtains in Context: W. B. Yeats’s Early Plays”, Irish Society for Theatre Research (ISTR), 2008.4.4, University College Dublin, Ireland.

[図書] (計2件)

①Christopher Murray (ed), Dublin: Carysfort Press, *Alive in Time: The Enduring Drama of Tom Murphy: New Essays*. 2010 (307 ページ)収録、Hiroko Mikami, “Famine in Context” (査読有)、pp. 39-55.

②風呂本武敏編、世界思想社、『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』2009年(332 ページ)収録、岡室美奈子(分担執筆)「サミュエル・ベケット」pp.262-271、三神弘子(分担執筆)「トム・マーフィーとフランク・マクギネス」pp.290-98

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡室 美奈子 (OKAMURO MINAKO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 10221847

(2)研究分担者

三神 弘子 (MIKAMI HIROKO)
早稲田大学・国際教養学術院・教授
研究者番号: 20181860

八木 斉子 (YAGI NAOKO)
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号: 10339666